

松嶋夜話 卷之下 一一

〔原文〕人常好食七辛之辛辣

〔訓読〕人常に好んで七辛の辛辣を食ふ

〔原文〕竟至作癖矣

〔訓読〕竟に癖を作るに至る

〔原文〕而用之有不可矣

〔訓読〕而して之を用いるに不可有り

〔原文〕大氏曰芥曰蓼曰胡椒曰番椒曰煙草曰生薑曰蜀椒

〔訓読〕大氏芥と曰ひ蓼と曰ひ胡椒と曰く番椒と曰く煙草と曰く生薑と曰く蜀椒曰ふ

〔原文〕是七辛也

〔訓読〕是れ七辛なり

〔原文〕外五辛佛制

〔訓読〕外か五辛は佛制

〔原文〕前写明之

〔訓読〕前写に之を明らかにす

〔原文〕所謂芥者温無毒

〔訓読〕所謂芥は温かく毒無し

〔原文〕其能除腎經邪氣

〔訓読〕其の能く腎經の邪氣を除く

〔原文〕治脚氣筋骨疼

〔訓読〕脚氣筋骨の疼を治し

〔原文〕然有昏眼目耗眞元之害

〔訓読〕然れども眼目を昏ふし、眞元を耗するの害有り

※「昏」「耗」の訓読がよくわかりません

〔原文〕強不可食矣

〔訓読〕強いて食ふべからず

〔原文〕蓼者辛温無毒

〔訓読〕蓼は辛温し毒無し

〔原文〕其苗葉益志殺蟲之能

〔訓読〕其の苗葉志を益し蟲を殺す能

〔原文〕其實止霍亂除腎氣之利

〔訓読〕其れ實は霍亂を止め腎氣の利あり

〔原文〕然多食發起心痛減損氣髓

〔訓読〕然ども多く食せば、心痛を發起し、氣髓を減損す

〔原文〕又曰二月堅不食之

〔訓読〕又曰く、二月之を食はざれば、

〔原文〕胡椒辛大温有功

〔訓読〕胡椒は辛く大温にして功有り

〔原文〕靖霍亂治冷痢除齒痛

〔訓読〕霍亂を靖め冷痢を治し齒痛を除す

〔原文〕其害助火昏目發瘡

〔訓読〕其の害、火を助け目を昏し瘡を發す

〔原文〕不時不食

〔訓読〕時ならずば食わず

〔原文〕冬與夏日一粒二粒用之有益

〔訓読〕冬と夏の日、一粒二粒、之を用いて益有り

〔原文〕番椒辛温有毒

〔訓読〕番椒は辛く温く、毒有り

〔原文〕其功治疝氣殺腸蟲驅痰滯

〔訓読〕其の功、疝氣を治し、腸蟲を殺し、痰が滯おるを驅る

〔原文〕其害發起惡瘡增益腫痛

〔訓読〕其の害、惡瘡を發起し、腫痛むこと增益す

〔原文〕如玄鑿丹水子所言不可食

〔訓読〕玄鑿が丹水子に言ふ所の如く食すべからず

※名古屋玄医：江戸初期の医師。京都の人。名護屋玄医とも書く。字は閱甫または富潤といい、宜春庵、丹水子、桐溪と号す。『難経註疏』『金匱註解』『医方問余』『丹水子』『食物本草』などが知られている。

〔原文〕煙草者辛温有毒

〔訓読〕煙草は辛温にして毒有り

〔原文〕人食之則時時思想不能離

〔訓読〕人之を食らわば、則ち時時思想して離ること能わず

〔原文〕故別名思想草

〔訓読〕故に別に思想草と名づく

〔原文〕少有消痞膈痰塞通腸胃筋脉之利

〔訓読〕少しく痞膈痰塞を消し、腸胃の筋脉を通じる利有り

〔原文〕然有日日禿眞氣涸陰血增口臭終損天年之大害

〔訓読〕然れども、日日眞氣を禿し、陰血を涸らし、口臭を増し、終に天年の大害有り

〔原文〕如沈穆之本草洞詮所言不可嗜矣

〔訓読〕沈穆の本草洞詮に言う所の如く嗜むべからず

※「本草洞詮」：清の沈穆による著作で、順治辛丑（1649）の自序がある。

〔原文〕且洞詮其功舉四

〔訓読〕且つ洞詮に其の功四を擧ぐ

〔原文〕一一非益事

〔訓読〕一一益事に非ず

〔原文〕不如始不食之好

〔訓読〕始めより之を食はざるを好しには如かず

〔原文〕生姜辛温無毒

〔訓読〕生姜は辛温にして毒無し

〔原文〕久服減志智缺筋力

〔訓読〕久しく服すれば、志智を減し筋力を缺く

〔原文〕少食療時疾

〔訓読〕少しく食へば時疾を療す

〔原文〕除風毒且止諸痛治金傷蛇傷

〔訓読〕風毒を除し、且つ諸痛を止め、金傷蛇傷を治す

〔原文〕辛菜中無似生姜美矣

〔訓読〕辛菜の中、生姜の美なるに似たる無し

〔原文〕八九月不食夜間不用云

〔訓読〕八九月に食はざれば、夜間には用いずと云う

〔原文〕蜀椒者辛温有毒

〔訓読〕蜀椒は辛温にして毒有り

〔原文〕久服傷血脉多食乏氣力

〔訓読〕久しく服すれば血脉を傷つけ、多く食べれば氣力を乏す

〔原文〕其能只暖腰膝除風邪

〔訓読〕其の能只だ腰膝を暖め、風邪を除きて

〔原文〕堅齒明目矣

〔訓読〕齒を堅くし目を明らかにす

〔原文〕或咬搏止金瘡血

〔訓読〕或いは咬搏せば、金瘡の血を止む

〔原文〕辛菜中除生姜美無如此物者

〔訓読〕辛菜の中生姜の美を除きて、此の如くの物に者の無し

〔原文〕恒可食

〔訓読〕恒に食うべし

〔原文〕然五月不食又口閉不食

〔訓読〕然して五月食はず、又た口閉じて食はず

〔原文〕有毒云

〔訓読〕毒有りと云う

〔原文〕余比年喜驅痞滯治疝氣嗜番椒

〔訓読〕余比年痞滯るを驅り疝氣を治るを喜びて、番椒を嗜む

〔原文〕一頓食次不欠

〔訓読〕一頓の食次すも欠かず

〔原文〕已爲番椒癖

〔訓読〕已に番椒の癖と爲る

〔原文〕一年遊寺岡主人都嫌辛辣物

〔訓読〕一年、寺岡に遊び、主人都て辛辣の物を嫌う

※寺岡：地名？

〔原文〕目而惡之

〔訓読〕目にも之を惡む

〔原文〕向膳次令求香積

〔訓読〕向膳の次、香積を求めしむ

〔原文〕職沒此物

〔訓読〕職（もと）此の物沒す

〔原文〕因浹旬不食之

〔訓読〕因りて浹旬之を食はず

〔原文〕厥后外番椒名癖

〔訓読〕厥の後、番椒の名癖を外す

〔原文〕只蜀椒用之

〔訓読〕只蜀椒之を用う

〔原文〕此有益也

〔訓読〕此れに益有るなり

〔原文〕因以

〔訓読〕因りて以へらく、

〔原文〕癖者有人不有於心

〔訓読〕癖は人有りて心に有らず

〔原文〕知於心無癖

〔訓読〕心に知れば癖無し

〔原文〕原知於癖之不有人

〔訓読〕原(も)と癖の人に有らざるを知る

〔原文〕故曰無色聲香味觸法

〔訓読〕故に曰く、色聲香味觸法無しと

〔原文〕我夫由人癖之有

〔訓読〕我夫れ人の癖の有るに由りて

〔原文〕至于心癖之無

〔訓読〕心癖の無きに至って

〔原文〕知癖病之原亡是

〔訓読〕癖病の原(も)と亡ぶ是れなるかを知る

※この訓読よくわかりません

〔原文〕吁賢賢易色可而已

〔訓読〕吁、賢賢色を易えるは可なるのみ